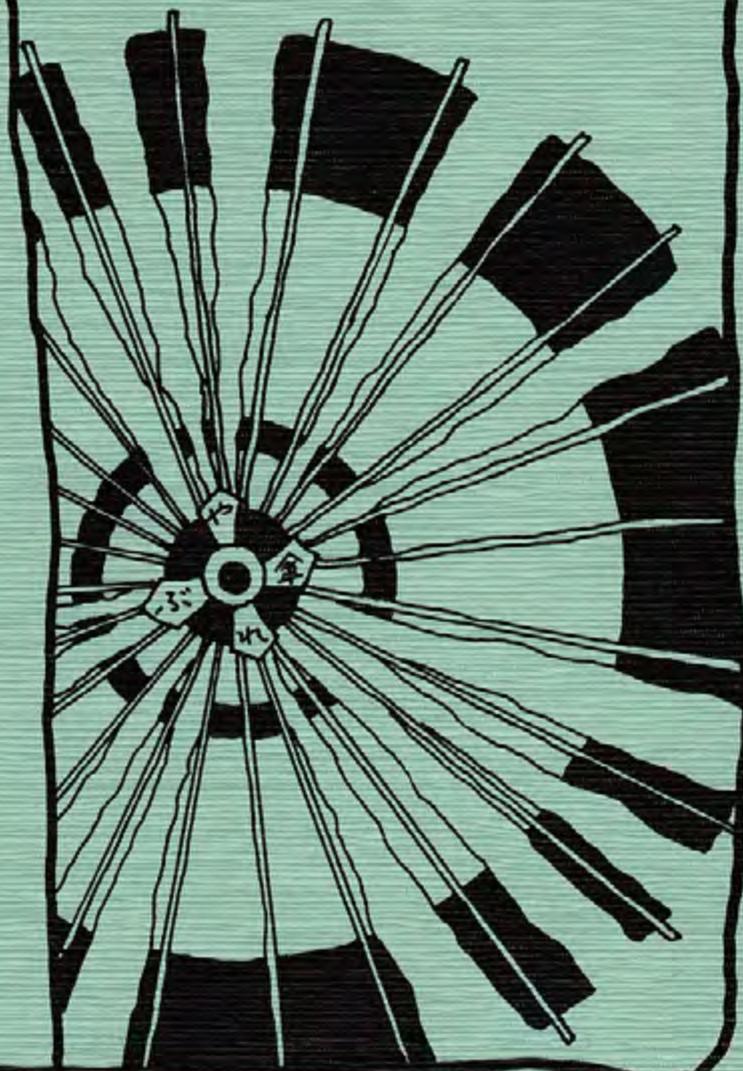


やぶれ傘



一〇〇〇号
二〇一八年二月

| | |
|--|--------|
| 一本の切山椒の香なりけり | 根橋宏次 |
| 看板に冬の日のこる蕎麦どころ | 大島英昭 |
| 手の上の海鼠は生きてゐるらしい | きくちきみえ |
| 凍て蝶を見てゐるやがて動くかと | 藤井美晴 |
| 手袋の手に飴玉を貰ひけり | 廣瀬雅男 |
| 何もなき冬の更地にもぐら塚 | 瀬島酒望 |
| 寒夕焼行 ^{みゆき} 幸 ^{ゆき} 通りの正面に | 丑久保 勲 |
| お手玉のひとつに鈴が冬日向 | 青谷小枝 |
| 捨て舟の中に細波春隣 | 天野美登里 |
| 大根の葉をわしづかみ二三本 | 白石正躬 |
| 欠伸する人と目の合ふ冬の暮 | 小山陽子 |
| 年の暮こゑをかけつつ位牌拭く | 有賀昌子 |
| 寝転んで枯葉だまりの香りかな | 渡邊孝彦 |
| 白息に眼鏡の曇るそんな朝 | 安藤久美子 |
| 人日のリハピリ室の混み合へり | 菊池洋子 |

抄 集 句 傘 ぶ れ や
選 夫 紀 崎 大

| | |
|------------------|-------|
| 千両を活けてひととせ終へる妻 | 秋山信行 |
| 公園のベンチに在れば冬の蠅 | 松村光典 |
| 岩がきは二個で一皿障子鳴る | 奥田温子 |
| 演壇の隅にストープ点いてをり | 神山市実 |
| 袖子の実のくたくたになり終ひ風呂 | 黒木東吾 |
| 鳩のみの静かな広場冬紅葉 | 齋藤朋子 |
| 寒桜天然石の椅子並ぶ | 中島和子 |
| 墨の香を聴きつつ賀状書きにけり | 貫井照子 |
| 初冬の山よりスカイツリー見る | 野口希代志 |
| 立冬や雑魚のあめだき売る露店 | 萩原溪人 |
| 高原に牛点々と秋の風 | 広瀬 濟 |
| 澄み切つて闇澄み切つて寒の月 | 武藤節子 |
| 峪道を白く照らして冬の月 | 湯本正友 |
| 鳥影に雪見障子をそつと開け | 石原健二 |
| 悴んで切れた電球振つてみる | 岩藤礼子 |

波の花

大崎紀夫

塩田をころがつてくる波の花
人がゐて冬田の端に焚く煙
田作りの苦みの残る舌へ酒
羽子板の裏絵を見せて置かれゐる
ひだりは田みぎの方へと梅探る

寒釣りの向かひへ午後の日はうつり
弥生坂くだれば池に鴨群れて
雪吊りの縄より雪のこぼれくる
靴並びをりストーブにやや離れ
冬日差す豚小屋下といふ釣り場
板壁の穴の近きに冬の蜂
木漏れ日のある雪道に入りけり

切山椒

根橋宏次

おでん酒締め茶飯とすることに
牡蠣筏どの岬鼻をまがりても
遠景をむらさき色に描いて冬
波の引く砂に映りてゐる千鳥
枝を切る音のつづいてゐる冬至
ポインセチア窯よりピザの掬はるる
一本の切山椒の香なりけり
貝殻にのせて焼く貝しづり雪
左手に鵜の乗る礁暖房車
手を打つて水気をとばす春隣

冬菜畑

大島英昭

来たことがあると気づいて落葉踏む
冬蝶は丸太朽ちたるそのあたり
敷地とも道ともつかず枇杷の花
立ち枯れし茄子の三畝となりにけり
看板に冬の日のこる蕎麦どころ
午後の日がかつと満天星冬紅葉
裸木の向かうの空に陽がのぼる
坂下は行きにも見たる冬菜畑
冬萌えの畑のあたりぶらぶらす
弁当を買ひにそこまで寒の入

海 鼠

きくちきみえ

凧を見たる眼を閉ぢにけり
走り根の落葉を分けてゐるところ
魴^{ぼう} 鮒^{ぼう}を入れて刺身の盛り合はせ
柿のへタ数多残してゐて枯木
コンビニのおでんの鍋はレジの横
マフラ―を巻きたる人の左利き
止まりたる独楽の匂ひを猫が嗅ぐ
人日の駄菓子屋にあるみかん飴
真ん中を鼻としマスク正しけり
手の上の海鼠は生きてゐるらしい

凍て蝶

藤井美晴

無花果の枯葉四五枚吹かれをり
灯ともせば柱の影が寒菊に
流木が河口をのぼる年の暮れ
プラタナス枯れて飛行機雲二本
こども等の自転車が来る花八手
一位の実ひとつ赤きに雪が降る
凍て蝶を見てゐるやがて動くかと
空き箱に猫ゐる気配寒の月
雪掻きのシャベルが石に当たりけり
そよりともなし上弦の月冴えて

手袋

廣瀬雅男

畑に立つ煙ひと筋山眠る
大きめの爪切り使ふ日短か
今日晴れて八十路の集ふ年忘れ
足元に雀来てゐる日向ぼこ
手袋の手に飴玉を貰ひけり
医者に行く日に印する初暦
どの窓も布団干したるホームかな
寒蜆腕を零るるほどに盛り
砂場にもすべり台にも雪積る
蠟梅の花に日差しと風少し

もぐら塚

瀬島洒望

都幾川の中州飛び去る石叩き
農学部三号館へ枯れ葉踏み
本殿のうしろに祠花八つ手
花枇杷や庚申塚は三差路に
本殿と拝殿と踏み初鴉
チヨコバナナ手に持つ孫と初詣
星冴ゆる資材置き場に砂利の山
何もなき冬の更地にもぐら塚
どつちを見ても粉雪が降つてゐる
雪降りてキーラを呑みレゲエ聴き

寒夕焼

丑久保勲

演壇は銀杏黄葉の散る下に
ポインセチア花屋はドアを開け放ち
午後になり予報通りに時一雨けり
料亭の卓の節穴フゲの皿
道すがら破魔矢の鈴は鳴りどほし
こつこつと追ひ越されけり寒の入
バス停でバスを降りれば冬の星
停車駅のメロデーを聴く冬の旅
寒夕焼行幸（みゆき）通りの正面に
ぴよぴよと青信号は春隣

冬

青谷小枝

プラタナスの実が青空に揺れて冬
冬ぬくし墓所への坂の石畳
セーターに赤いハートとイニシャルと
さざんくわの道幾重にも嬰をくるみ
冬ぬくし団子屋前に鳩のゐて
お手玉のひとつに鈴が冬日向
また来ては側溝へ雪放り込む
舟揚ぐる滑車のロープ凍てにけり
水を出てからのベタ足大白鳥
山始湯呑茶碗に神酒ついで

春 隣

天野美登里

燭台に薄埃ある小六月
片隅にかたまる冬のあめんぼう
寒き夜のテーブルに書き方字典
ぶらぶらと石畳過ぎ花八手
木洩れ日は綿虫のとぶ坂道に
寄り来たたる猫をからかふ置炬燵
冬茜消え飛行機は東京へ
川原よりどんどの竹のはぜる音
雪晴れのひと日の無人精米所
捨て舟の中に細波春隣

大
根

白石正躬

朝霧の土手の斜面のもぐら塚
千両の実をこぼしたる鳥がゐて
川べりを犬つれ歩く冬の星
細いのと太いのもある根深汁
大根の葉をわしづかみ二三本
大根を間引きしあとは穴のまま
寝転んで部屋の冬日にあたりある
初鳥ゴミ捨て場所をごちやごちやに
枯るる中渡良瀬川の水が見え
日脚伸ぶ表より裏庭が見え

冬の暮

小山陽子

欠伸する人と目の合ふ冬の暮
冬の蠅影が揺れば少し飛び
鍋蓋の取っ手を直す三日かな
ケ―タイの画面に埃冬日向
不機嫌な人は可愛いマフラ―で
寒き夜に中也の詩集買ひ帰る
寒月や玄関までの闇を行く
実万両句碑はやたらとつやつやし
百円の瓶に歪みや春近し
ぱたと云ひ倒れる鞆春近し

年の暮

有賀昌子

申呑んで魚突つ立つ囲炉裏端
駅伝の小旗かさかさ冬初め
年の暮こゑをかけつつ位牌拭く
釣堀へおにぎり持つて煤逃げと
真つ白な筆泳がせて初硯
命名の墨の滲みも淑気かな
冬の月見てゐて電話したくなり
年新た一指にきつくカット絆
一振りの欄間の弓に淑気満つ
冬ざくら白湯にとけ出す砂糖菓子

冬紅葉

渡邊孝彦

葉表を小虫這ひゐる青木の実
雲白き夜の明るき冬紅葉
寒き日の県境の橋渡りけり
寝転んで枯葉だまりの香りかな
初鴉六郷川を超え行けり
朝晴れて雪吊ばかり目立つ町
風花がふはと百万石通り
金沢の三日日差しはあはあはと
正月の新幹線の鼻を撮り
子規句碑の裏に虚子句碑寒つばき

白息

安藤久美子

柚子風呂は銭湯と決め午後三時
沿線の立退き続く冬の街
凍星はヒマラヤ杉の天辺に
ラム革の手袋指に馴染ませて
冬帽子切手の不足分を貼り
ストーブを点けコロンビア珈琲を
千両の赤と黄の実へ雨が降る
マスクしてマスクの人と会釈して
堀越しに蠟梅が見え塔が見え
白息に眼鏡の曇るそんな朝

人 日

菊池洋子

ひと息に水すべらせて紙漉けり
木枯の吹き抜けてゆく・仁王門
マフラーの真つ赤なガイド先頭に
壺焼の芋に残りし鉤のあと
はけ雲のいろかはりゆく冬夕焼
手袋を嵌めてタッチの改札口
煤払使はぬままに健康具
裸木の空真つ青に保育園
初鴉まつぼつくりに躓けり
人日のリハビリ室の混み合へり